



相国寺旧境内出土の一括廃棄土師器皿：個体数推定の検討について

著者	吹田 裕幸
雑誌名	文化情報学
巻	7
号	2
ページ	24-26
発行年	2012-03-31
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013125

資料紹介

相国寺旧境内出土の一括廃棄土師器皿

— 個体数推定の検討について —

吹田 裕幸

1. はじめに

同志社大学では、2008年度から相国寺旧境内にあたる今出川キャンパスの整備に伴い発掘調査が行われている。

相国寺は臨済宗相国寺派の大本山であり、夢窓疎石を勧請開山とし、その甥である春屋妙葩を第二世として、足利義満が永徳2年（1382）に室町幕府の東側に創建した。五山第二位の上刹であり、一時期、五山第一位となったこともある寺院である。その後、戦国時代に豊臣秀吉が堂塔を再興し、江戸幕府から寺領の寄進が行われ、そして現在に至っている。

今回資料紹介を行うのは、このような歴史的背景のもとで2010年の2月から3月に行った調査で発見された遺構とその出土遺物である。調査地点は寧静館の北側で、元同志社中学グラウンドの南東隅にあたり、その南部から土師器皿を大量に含むSD4005（幅70cm深さ20cm）が検出された。SDとは溝と推定された遺構につけられる記号である。

相国寺は応仁の乱や天明の大火の際に建物が焼失しているため、境内の様々な建造物を再建し、その際に次々に土を積み重ねることで土地の再利用を行った。そのため、これらの出来事の後にはそれまでの地表面と同時に様々な遺物、遺構も地中に埋まるということになる。

ただし、土師器皿が大量に集中して出土することは少なく、その場合は意図的に一括廃棄されたものであると推定される。SD4005では、白色と褐色の皿が混在している。それらは14世紀の相国寺創建期前後の土師器皿であり、儀式に伴って廃棄された可能性がある。



写真1 SD4005 出土状況 (西から)



写真2 SD4005 出土土師器皿
(左: 白色系 右: 褐色系)

2. 定量化手法の紹介

実際に発掘によって出土する遺物は、ほとんどが破片となっている。数多くの研究者たちはこのような破片情報から年代や産地を推定し、考察に役立てるように土師器などの編年表を公表している。しかし、これは定性的な手法による研究であり、定量的な分析を行うためにはこのデータを何らかの形で変換しなければならない。SD4005の遺物に対する検討により、年代は推定されたが、大量出土の意味については正確な遺物数の推定という定量的な分析を用いて読み解く必要がある。

遺物を定量的に分析するにあたって、具体的な

作業として破片数データから個体数データへの変換が必要となる。そのためにまず接合によりデータの集積化が行われなければならない。遺物の色や接合面、全体の形状などを総合的に判断して、破片を接合し、一つの遺物としてデータを取得する。しかし、実際は同一個体であっても断面が摩耗して接合しきれない場合がある。そのような場合は元々一つのものであったデータを二重に計測することになってしまう。これを解決すべく検討されてきた手法の一つが口縁部計測法である。

これは土師器や陶磁器などが一般に点対称であることを利用して、口縁部の残存率を合計する手法である。この手法では底部が存在せずとも接合などにより口縁部分が完全に残っていれば、それを一点とする。例えば、三分の一ある破片が3点集まるとそれを1点とカウントする。ただし、測定時に十二分の一など一定の基準を設け、それ以下のものは計測しない。理由は残存率の低い遺物の場合、直径の大きさを正確に推定することができず、残存率に誤差が出やすいからである。

宇野隆夫氏がまとめた、京都大学の発掘調査報告書では、口縁部の半径毎に分類し、仕様用途別の組成比率などを導き出している。また、宇野氏は口縁部残存率の基準として十二分の一が有用であることも指摘している。

3. SD4005 出土土師器皿の定量分析

SD4005 出土土師器皿の破片数は431点である。これらの接合を行った結果、破片数は225点となった。これが接合により想定される個体数である。また、口縁部残存率が全体の十二分の一以上の遺物を対象とし、合計すると推定遺物数は66.8点という数値となった。さらに、全体の八分の一以上を合計すると63.5点、六分の一とすると59.4点となった。

以上の結果を口縁部残存率が十二分の一を基準として考察すると、SD4005には少なくとも67点以上、225点以下の土師器皿が存在していたということになる。この結果より、一つの土師器皿が平均6~7点の破片となって埋まっていたと予想することができる。

ところで、表1は宇野隆夫氏が『国立歴史民俗博物館 研究報告』第71集で提示している種類・器種別食器組成のデータのうち、土師器皿を対象として抜粋したものである。これによると、一つ

表1 各遺跡の破片数と換算個体数

	破片数	換算 個体数	破片数 / 換算 個体
平安京左京八 条三坊 SD25	2789	169	16.5
平安京左京八 条三坊 SE1	4325	262.1	16.5
高槻市宮田遺 跡2A区	151	9.2	16.4
高槻市宮田遺 跡2B区	900	54.5	16.5
堺市菱木下遺 跡第Ⅲ区	662	40.1	16.5
堺市菱木下遺 跡第Ⅱ区	205	12.4	16.5
根来寺 NG81地区	9128	553.2	16.5
根来寺 NG80地区	8276	501.6	16.4
計	26436	1602.1	16.5

の土師器皿が平均16.5個の破片となって発掘されたという統計データが導き出された。

それに比べると今回のSD4005の土師器皿はあまり細かく割れていないということになる。その理由として考えられるのは一括廃棄された段階で土をかけて埋められたため、建物の焼失などによる一般的な埋没と比べ、より多く破碎される機会が少なかった可能性である。他の一括廃棄土坑と比較できればこの推測を検証することができるだろう。

4. まとめ

今回は調査区内の一つの遺構という限られた範囲で分析を行い、破片数と個体数の関係を明らかにしようと試みた。その結果指摘できたのは、一つが破片と個体数の間に一定の法則があるという推測、もう一つが埋没状況の違いによる破片数の増減である。そして最終的に目指すのは、破片というデータから、完形遺物数の推測が行えるかどうかである。この分析をもとに、正確な個体数を導くことができれば、当時の様子を推測することは不可能ではないと考える。もちろん、そのためにはさらに多くの遺物データを収集することが必要であり、最適な分析方法を選択することが必要である。

また、考古学の分野においては定量的なデータ分析はそれほど多く行われていない。今回紹介した手法では遺物情報の集積という目的は果たしているものの、口縁部を含まない遺物データを全て切り捨てていることも考えなければならない。これらを改良し、実際の現地の総合的な情報を考慮しつつ上手く適応させていくことで歴史文化情報の復元を目指すことが可能になる。

最後に小稿の執筆にあたり、SD4005の出土遺物を対象とした資料紹介をすることに快く承諾して頂き、またご指導を賜った歴史資料館の若林邦彦准教授、浜中邦弘准教授、調査員、職員の方々に謝辞を申し上げます。

文 献

- 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981 『京都大学埋蔵文化財調査報告 一白河北殿北辺の調査一』 II
- 国立歴史民俗博物館 1997 『国立歴史民俗博物館研究報告 一中世食文化の基礎的研究一』 71
- 同志社大学歴史資料館 2010 『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査 (第1次-第3次)』